

学位論文審査の要旨

論文提出者	永石恵子	
論文審査委員	(主査) 朝日大学歯学部教授 田村康夫 (副査) 朝日大学歯学部教授 江尻貞一 (副査) 朝日大学歯学部教授 北井則行	
論文題目	無歯期乳児の口蓋形態の特徴および成長による変化	
論文審査の要旨	<p>乳児の口蓋形態は月齢、習癖また授乳方法など様々な要因で影響され、変化することが推測されている。しかし乳児の口蓋については成長による変化も含めほとんど明らかにされていないのが現状である。本研究は、乳児期の口蓋形態の特徴について明らかにする目的で、無歯期における成長による変化および授乳方法が口蓋形態に及ぼす影響について、さらに得られたデータから乳児上顎の平均的立体模型を再現することを目的とした。</p> <p>生後 1.3 か月から 9.3 か月の無歯期の健常乳児 37 名から得られた上顎模型を非接触型三次元計測装置のレーザー計測により口蓋形状をサンプリングし、得られた点列データを立体画像としてコンピュータ上で再構築し計測対象としている。計測点および計測項目の詳細は、論文内容要旨の通りである。</p> <p>その結果、模型は、三次元画像としてコンピュータ上に立体的に再構築することができ、模型の実測に比べ詳細な観察や計測を行うのに有用であるとし、またさらには CAD-CAM 技術を応用し合成樹脂により各群の立体平均化モデルを作製している。1-2 か月群、3-4 か月群および 5 か月以上群の月齢群別比較では、長径計測において A-C に、幅径計測では B-B'、M-M'、C-C' に有意な増大を認めている。一方、口蓋の深さや口蓋内表面積は 3 群間で差は認められなかったという。また群間の変化がみられた部位では、C-C' より前方の成長が比較的大きく、これら成長は前歯の歯槽骨内での成長と関連し、生後 2 か月を過ぎた頃より急速に生じると考察している。一方、吸啜窩の出現は、全体で 70.3% であり、成長による吸啜窩幅径の変化はみられなかったという。またさらに授乳方法による影響についても検討し、長径、幅径、口蓋深さ及び表面積のすべての計測項目において、授乳方法間で差を認めない結果を得ている。</p> <p>以上より、本計測システムは無歯期乳児の上顎模型を立体的画像として再構築することができ、詳細な計測を行うのに有用であることを示唆した。また無歯期での口蓋形態の変化には、C-C' より前方の成長が長径・幅径とも比較的大きく、成長は生後 2 か月を過ぎた頃から生じていたことより、乳前歯の成長と骨内萌出、永久歯胚の成長とが関係していることや、無歯期においては授乳方法による口蓋形態への影響はみられなかったとする結論を得ている。</p> <p>審査委員は、本論文が無歯期における乳児の口蓋形態の特徴および成長による変化を明らかにしていることから、上顎の成長を検討する上での貴重な資料を提供したものと評価し、学位(歯学)授与に値するものと判定した。</p>	